

先端技術4研究に奨励金

吉田学術教育振興会 篠原・九大院助教ら

県内の学術研究者を支援するため、久留米市の財団法人・吉田学術教育振興会(吉田曉生理事長)は14日、二酸化炭素濃度計測器の開発や混晶半導体の作製法など4件の先端技術・研究に対し、それぞれ100万円の学術奨励金を贈呈した。

奨励金を受けた研究者は、大牟田市の有明工業高等専門学校電気工学科の内海通弘教授▽九州工業大学大学院生命体工学研究科の安田隆・助教▽久留米工業高等専門学校材料工学科の奥山哲也・助教▽九州大大学院総合理工学研究院の篠原俊二郎・助教。

内海教授は、装置が大きくて、レーザーなどを使う現在の高価な二酸化炭素濃度計測器について、LED(発光ダイオード)半導体を利用した発光装置を利用した、安価で小型の計測器の開発に意欲を燃やす。地球温暖化防止に向け、空調装置に利用できる。平衡器

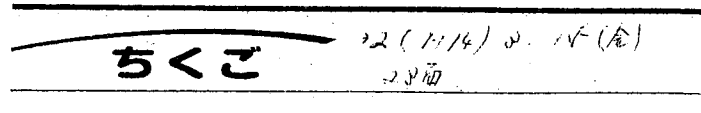
を取り付ければ、海中の二酸化炭素を測ることも可能で、有明海の赤潮・青潮の監視にも役立てたいとしている。

安田助教は、微小世界の神経線維の伸長を誘導する研究をし、生体と機械の接続を確実、強固なものにしたいという。脳の機能修復へ道を開くものと期待される。奥山助教は、次世代のシリコンとゲルマニウムの混晶半導体について、安価でたれにもできる製法の開発に挑む。現在の製法

は、高価で大量生産に適さないという。

吉田学術教育振興会は85年、電線製造会社「大電」の初代社長、吉田直大氏が私財を提供して発足。毎年、高校生や大学生への奨学金、学校への助成、図書の寄贈などを続けてきた。

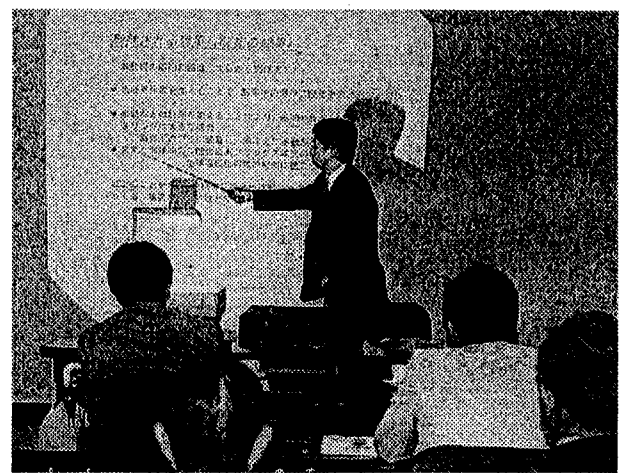
学術奨励金は今回の4人を合わせて計79人。これら寄金事業の総額は3億円を突破した。吉田理事長は「福岡から世に出る研究が出れば、うれしく」と期待している。



毎日新聞 (第3種郵便物認可)

吉田学術振興会が奨励金

4人に各100万円贈る



贈呈式であった研究テーマの概要説明

吉田学術教育振興会(吉田曉生理事長)の学術奨励金の贈呈式が14日、久留米市南町の大電本社であった。同会が、4人は有明高等電気工学科教授、内海通弘さん(46)▽久留米高等材料工学科助教、奥山哲也さん(40)▽九州大大学院総合理工学研究院助教、篠原俊二郎さん▽九州工業大学大学院生命体工学研究科助教、安田隆さん(36)。

贈呈式では、それぞれが研究テーマの概要を説明した。神経に電気刺激を与える微小な装置を開発中の安田さんは「電気刺激で神経が修復でき、将来的にはパーキンソン病やアルツハイマー型痴呆症の治療法になるかもしれない。神経線維と同じく劣程度の先端を持つ装置が目標」と話した。同会は大電の創業者、故吉田直大さんが私財を投じて1985年に設立した。これまでに研究者79人に贈呈している。

【近藤聡司】